

埋立の發達

がある。英國公使館員の宿所であつた。その下流の海岸埋立てられて一面の市街をなし、三菱倉庫・浦賀造船所分工場などを始めとして大なる建物がある。一灣を隔て、高島驛と鐵道貨物線を望み、波光その間に明滅す。蒼海橋から横濱通ひの小蒸氣が出る。東北に進めば臺場跡・豆搾會社・内田造船所などの大建物がある。此邊の發達は近來殊に著しくなつて來た。御殿町は徳川氏が陣屋を置いた地である。

浦島太郎の墓

【浦島岡】東神奈川驛の西北に連亘する岡を浦島岡といふ。何と美しい名ではないか。これは昔此岡の麓に觀福寺といふ寺があつたが、明治の始都筑街道の傍に移されて浦島寺と謂はれて居る。その觀福寺の後山に、大きな傘松があり浦島太郎の墓と稱する五輪の塔があつて、共に近年まであつたが、松は近年枯れ、土は取去られて、今は跡形もない、唯快活なる住宅地と化しつゝある。浦島太郎は丹波の水江の人、龍宮から歸つて親戚故舊を見出すことが出来ぬ。東國に父があると聞いて茲まで來た。(東海道名所圖會所載) 尋ねあぐんで玉手箱を開くとあの始末、多分入

都筑街道

江川の口あたりで開いたであらう。海の横濱に海の昔話が傳はつて居るのは面白い【豊顯寺】神奈川の内地に桐畑・廣臺・二谷・栗田谷などがある。麥苗菜花相連る處、次第に住宅地に化しつゝある。都筑街道は縣立工業學校の前を通る。百姓の臭い物を積んだ車が、本覺寺下から茲へ出て來る。臭氣十里鼻向がならぬ。高臺を一本松といふ。近年まで航海の目標になつた松があつた。捜眞女學校がその近くにあり。三澤の谷は未だ發展せず。民家斷續し、溪流は潺々として流れ、林間幽禽の聲を聽く。景物實に俗腸を洗ふに足る。横濱ガーデンを右に見て、その極まる處に三澤壇林と稱せらるゝ豊顯寺がある。永正十二年青木城主多米元興の開基で、日蓮宗である。堂宇宏大、境内幽邃、本市無比の靈場である。享保年間壇林を新設して、一時は三百人の學生があつたといふ事である。境内櫻樹數千株、春風駘蕩の候滿都の士女雲集して、さながら酔へるが如し。近き高臺に横濱第二中學校がある。

豊顯寺

その七 近郊

昔の程谷

【保土ヶ谷町】 橋樹郡に属す。人口二萬。神戸・程谷・帷子・岩間の四つに分たる昔の五十三次の程谷驛の地である。太田道灌の平安記行に

日盛りは片はだ脱ぎて旅人の汗水になる帷子の里

とある。齋藤徳元の關東下向記に「帷子の里も布子の師走かな」とある。昔の街道は稍北の方にあつたが、慶安の頃今の筋に更へられたといふ事である。

常盤園

市街は東西一線をなし、帷子川中央を横断す。川筋は一峡谷をなし、附近には富士紡績會社分工場を始として多くの工場が出来、縣の農事試験場もある。女子感化事業たる家庭學園もある。常盤園は又岡野公園と稱し、全く塵界を離れた處にある。

西谷貯水場

梅櫻多く、域内數萬坪。杖を曳く者が多い。帷子川の峡谷を上ること二十餘町に西谷貯水場がある。横濱水道の瀘過池があつて、規模宏大、域内廣潤である。更に湖

金澤街道

れば二俣川に出る。茲に畠山重忠戦死の遺跡がある。

程谷驛附近が保土が谷町の要部である。驛の西より南の方山を趣えて、弘明寺、金

境木

澤に出る古道がある。これが江戸より金澤にゆく舊街道である。町の西端は東海道線に沿うて長く連り、昔ながらの面影を残して居る。その西端に權太坂といふ急坂がある。その頂が武相の境で、標高七十米突、境木といふ。鐵道のトンネルはその西北にある。驛より戸塚まで二里。

生見尾村

【生麥英人の碑】 市の東北に接續せる、橋樹郡生見尾村生麥にある。生見尾村は市町村制實施の時、生麥・鶴見・東寺尾の三部落を併せて、その一字宛を取つた新村名である。人口一萬五千。鶴見は今や京濱間の要地となり、生麥は本市と鶴見との間にあつて海に沿ひ、疎松人家斷續して居る。京濱電車生麥停留場より四五町の松並木の間に英人リチードソンの碑がある。文久二年八月二十一日、島津久光六百人を率ゐて川崎を出でて茲に至ると、英人四名、騎馬でその列を横断せんとした。三

英人の碑

人は商人、一人は婦人である。遊覽として横濱から來たのである。薩摩準人何ぞ黙すべき。先驅は直にリチードソンを馬より斬り落して即死せしめ、一人の商人は左腕を斬られ、婦人は帽を切り落されたるのみで逃げた。島津の一行は、當夜神奈川泊の豫定なりしを程谷に變更した。神奈川奉行が島津侯を箱根にて差留むべしと命令せしに、幕府は薩藩を憚つて之を取消した。斯くて怪我人は神奈川に駆込む。横濱から英兵が上陸するといふ騒ぎで、彼生麥事件なる外交問題を引起した。翌年三月英艦數隻渡來して詰問したから、幕府は十一萬ポンドを支給した。これより英佛兩國兵山手に兵營を建て、警戒した。英兵の服装赤かりしによりて赤隊と謂はれ、明治七年に及んだ。

【子安觀音と花月園】 觀音は生麥なる花月園の境内にはさまる。子生山東福寺といふ眞言宗の寺である。堀河帝の寛治元年の草創で、其後領主稻毛重成祈つて子を得寺領を寄附し、地を子安と稱せしと言ひ傳ふ、花月園は觀音の境内を取圍みて經營

せる遊覽所で、縁陰深き處に、運動具・飲食店備はり、近郊の娛樂遊覽所として、市人の多く行く處である。

【總持寺】 總持寺は曹洞宗大本山で、鶴見にある。丘陵溪谷頗る幽邃で、眺望亦よろし。寺はもと能登國鳳至郡にあつて、輪奐宏大であつたが、明治三十四年伽藍悉く炎上した。帝都東遷するも、その附近に大本山を移して君國の無窮を祈願する。企なきを見て、斷然大本山の鶴見移轉を斷行し、放光堂・跳龍堂先づ成りて、明治十四年移轉式を擧げた。大祖殿は二十五間四面の檜造り、佛殿は十二間四面の檼作りである。その他、山門・庫裡・鐘樓など具はりて東海の一偉觀である。開山は鎌倉時代の末に出でたる瑩山紹瑾和尚で、明治天皇より常濟大師と謚せられ、現貫主は石川素童師である。

【潮田】 鶴見川を渡れば平遠なる町田村。横濱外港に面せる地で、近來工場地として非常に優勢である。淺野造船所茲にあり。その偉大なる装置は東海道列車の車窓

に現はる。又茲に旭硝子會社鶴見工場がある。これも廣大である。次の田島村鹽濱に、淺野セメント會社川崎工場がある。大煙突の白煙、濛々として天に沖し、頗る壯觀を呈して居る。これ等諸會社は數千の職工を有し、蘆荻叢生せし郊外の地を變じて、工場地に變じつゝある。

【川崎町】 六郷川を隔て、東京府荏原縣六郷村に接し、南は大師河原村に接す。

近時太工場の集合地となり、非常の殷賑地となつた。人口二萬五千、縣下に於て横濱・横須賀に次いで先づ市制を布かるべきは此町であらう。將來の大横濱は茲に及び、東京市も延びて茲に至つて相接する事になるに相違ない。鎌倉時代には佐々木高綱の領地、昔からの海道で、東海道五十三驛の一驛である。太田道灌の平安記行に

朝ぼらけ霞うながす川崎に波と見るまでたてる白鷺

六郷渡には昔より橋のあつた事もあつたが、元祿年間に洪水にて落ちてより、久し

く無かつた。妙遠寺に「泉田二君功德碑」がある。小泉、田中兩氏の事で、六郷川水利に大功ある人である。田中氏は丘隔と號す。足柄上郡大口堤もその功績に出でしもので、先年贈位せられた。

【平間寺】 俗に川崎大師といふ。實は大師河原村にある。川崎より電車に乗つて、六郷堤の櫻のトンネルを通つて、二十町にして達す。葛餅・奈良漬・麥羹細工など賣る店軒を駢べて、一異觀を呈して居る。山門、殿堂宏壯で、紫煙縷々として昇る。

眞言宗の別格本山で、本尊は弘法大師である。その縁起によれば、平間兼乘といふ者網を海中に投じて、丈五寸の大師の坐像を得、堂宇を建立したといふ事である。境内廣瀾、泉水、運動場等の設備あり。艶陽四月には長堤櫻花爛漫として彩雲紅霞の裡を行く想ひあらしめ、成田・善光寺・金毘羅と共に、本邦に於ける賽客多き靈場として人に知られて居る。その節分の雑沓は最も甚しい。

【羽田・蒲山・地上】 川崎大師より少しく進んで、六郷川に出ると茲に名は早船で最

穴守稻荷

本門寺

矢口の渡

多摩川

小机城址

も遅い船が出る。羽田の穴守まで約二十町を下る間、長江と漁村の光景天然一幅の畫圖である。穴守には稻荷社がある。花柳社會の信仰者が多い。電車蒲田に通ず。蒲田には梅屋敷と菖蒲園とある。池上の高臺に本門寺がある。日蓮宗の巨刹である。境内に日蓮上人の遷化した寺があつて、その倚り掛つて瞑せし柱がある。その當時池上氏の邸宅であつた。子孫今は大師河原村に住んで居る。それから多摩川を渡る處を矢口の渡といふ。新田義興（義貞の子）の謀殺された處で有名である。近く新田神社がある。此多摩川（下流六郷川）は本邦六玉川の一つで、長堤十里、古は碯の名所であつた。

見渡せば浪のしがらみかけてけり

うの花さける玉川の里

相 摸

【小机城址と川和の菊】 小机城址は、横濱線小机驛に近き山上にあつて、土人は城山といふ。今南北一丁、東西四丁許の阜があつて、周圍に塚が残つて居る。文明年

川和の菊

間、太田道灌此城を攻落して「小机はまづ手習ひの始にていろはにほへとちりぐに
なる」と得意な歌を詠んだと傳へられてある。北條氏綱は上杉朝興を破り、凱旋の
後小机城を修め、老臣笠原越前守を城代として居住せしめたといふ事である。川和
は徳川二代將軍夫人の化粧料地、菊は中山恒三郎氏、その庭内に栽培せるもので、
やがて百年以來の事業である。累代その栽培に盡し、皇族の台臨もあり、秋郊杖を
曳く者が多い。神奈川町を距ること二里半。

本市より内地主要地に至る距離

上り方面—東京通過は一哩を加算す

東京	一八哩	八王子	二七	甲府	八〇	諏訪	一二一	千葉	三九
銚子	九一	勝浦	八三	木更津	六一	北條	九五	水戸	九一
宇都宮	八四	日光	一〇九	高崎	八二	輕井澤	一〇七	長野	一五六
新潟	二八五	富山	二七三	金澤	三四七	福島	一八七	仙臺	二四一
青森	四七五	函館	青森ヨリ海上二十八里			札幌	箱館ヨリ三一五		
鎌倉	一三哩	横須賀	二〇	大磯	二四	國府津	三〇	御殿場	五二
沼津	七一	静岡	一〇一	濱松	一四七	名古屋	二三九	山田	三一
京都	三一	大阪	三三八	神戸	三五八	岡山	四四七	廣島	五四八
下關	六八七	下關門司間一哩		福岡	七三六	長崎	八五三	熊本	八一〇
鹿児島	九二六	下關釜山間一二二哩							
京城	二八〇	平壤	四四四	新義州	三一	奉天	七六〇	長春	一〇五〇
		釜山	よ	り					

奉天大連間一四六

横濱年中行事

- 一月 初日の出—伊勢山・高島山・鶴屋公園 伊勢山初詣 消防出初式 大相撲
- 二月 節分會—野毛不動・川崎大師 觀梅—杉田・岡野公園・蒲田
- 三月 節句 卒業式
- 四月 櫻狩—横濱公園・三溪園・伊勢山・掃部山・豐顯寺 汐干狩—磯子・本牧・子安 金澤
- 五月 節句 伊勢山大神宮例祭 大相撲 根岸の競馬 菖蒲—三溪園・蒲田
- 六月 辨天祭 洲崎神社例祭 眞照寺の夏菊
- 七月 開港記念日 米國獨立祭 干蘭盆會
- 八月 海水浴—磯子・本牧・山手町海岸・子安 鮎狩—相摸川・多摩川

九月 日枝神社祭典 観月—伊勢山・掃部山・高島山・根岸不動・山下町海岸
十月 お會式—地上本門寺 根岸競馬
十一月 菊—野澤・川和 紅葉—豊顯寺・紅葉坂 酉の市
十二月 クリスマス 歳の市

横濱八景

多くは明治の中頃まで

其 一

伊勢山秋月 本牧 晴嵐 淺間山暮雪 波止場歸帆 公園 夜雨
鐵橋 夕照 吉田 落雁 北方 晚鐘
其 二
平沼 夕照 根岸 暮雪 神奈川晴嵐 掃部山秋月 太田 夜雨
本牧 歸帆 野毛 晚鐘 吉田 落雁

其 三

伊勢山の朝日 杉田の春色 公園の櫻雲 十二天の浴潮 吉田橋の行人
根岸の競馬 紅葉坂の楓 神奈川の漁火

其 四

波止場の月 夜の伊勢佐木町 山下海水浴 公園の朝顔
お三の宮の夕立 伊勢山の晚景 程が谷の螢 獨立祭の花火

横濱名木

- 1 公園—アメリカカ松(グラント將軍手植)
- 2 寶生寺—千年松
- 3 根岸寶積寺—榎
- 4 本牧原—抱合松
- 5 根岸加曾—玉楠
- 6 英國領事館—玉楠
- 7 豊顯寺—高野榎
- 8 淨瀧寺—多行松
- 9 清水山—蘇生松
- 10 多聞院—多行松

議論なら何とでも書けるが、事實を書くには據り所が確かでなければならぬ。故に一寸した事にも心を痛める事がある。例へば鐵道開業式日に、明治五年九月九日と九月十七日との二種がある。開港五十年史などは九日の方である。予は縣の屬官の書いた書によつて十七日にして置いた。之を曾我部君に語れば「それは九日であつたが急に十七日に延期されたので、その布告を持つて居る」と言はれて安心した。趣意書や次第書の印刷には九日と残つて居るに相違ない。開港五十年史などは、それに據つて書いたのである。斯る事が尙あると思ふ。御忠言を希望する。今後本市に新しい研究資料が出れば本書に取り入れられる。斯くして屢書き易へて年鑑の様にし、比較的完全のものとする考である。自分の始めた事業に犠牲を拂はるゝ有志に對して、之を世に報告する機關がないから本書を借りる。即ち本書は予が一代の事業になる。

著者

附 録

予が事業——横濱實科高等女學校

設立者兼校長 佐藤善治郎

本校は、南吉田の一角に呱呱の聲を擧げて茲に六年。今や創立第七年の事業の進行中である。此間世界の氣勢は幾變遷して居る。本校事業は幸に發展して、當初七十九名の生徒、今や八百餘名となる。誠に聖代の餘澤と縣市民各位の厚意によるので、吾人の感激に堪へぬ事である。事業の性質が最も公共的のものであるから、極めて慎重に經營せねばならぬ。有力者各位の勢力の繩張の中に入つて事業をするのであるから、常に吾人の計畫を披瀝し、極めて公平なる厚意に浴する事は、自ら吾人の禮である。本校は今に至つては、もはや有力者の見道がす事の出來ぬ事業となつ

たと考へる。

思ふに人の一生は、芝居的一幕の如きものである。この一幕を最も有効に送りたいといふのが、人情である。兵士となりて戦場に立ち、奮戦敵弾に中つて鮮血淋漓として斃るゝは、男子の快事である。議政壇上に立つて、叱咤風雲を捲くも、男子の快事である。角力を見れば横綱になりたしと思ひ、帝展を見れば一流の畫家を羨むが併し何れも吾人の運命でない。吾人は着實なる教育事業に携つて居る。斯の事業を以て人間的一幕を終り、一は以て市民たる義務を盡したいと思ふ。吾人の目的は茲にある。財産や、名譽や、權勢、それは吾人の目的ではない。市民幸に吾人の微衷を知つて、能く利用せらるゝならば、吾人は實に生涯を有効に送ることが出来る。

【創立の覺悟】 予は多年教育の職を奉じて居つた。然るにゆくりなくも、自ら築いた土臺の上に登つて教育する事になつた。生れて極めて樂天的無頓着の人物、世事にうごく懸引を知らず。しかも僅に二週間の計畫で、大膽にも此事業を創めたので

ある。地はこれ天下活動の中心、環視する人は事業上の百鍊の士である。市民に縁故の少き予が、特別の援助者を求めず、市民全體の厚意の下に、至誠以て此事業を大成せんとして起つたのである。成否の問題でなくて、實に生死の問題であつた。幸に満都の市民、予が事業に同情を與へられ、諸事都合よく進捗した。當時の印刷物に「僅々半月の計畫、人心翕然として之に嚮ひ、感泣に堪へぬ事のみぞ多き。神の照鑑しますを知る」の文字、今もありくゞと感謝の情を物語つて居る。時は大正三年四月であつた。

【經營の方針】 事業を爲すには、先づ目的を確定して、之に向つて進むことが大切である。當初立てたる方針の、今に至るまで聊も變らぬは、確に幸福である。

標榜 家庭趣味に充ち、實際生活に堪ふる女子を教養す。——自覺と心の平和と勤勉と健康とは、本校教養方針の骨子なり。

職員 學校最要の事業を職員招聘に置く。一般學科は男女高等師範學校、裁縫科は

東京裁縫女學校の優秀なる卒業生に限り、各その學校の推薦を受く。その他の技藝科は、本市に於て聘し得る最上の専門家とす。

經費 公立學校の四分の三の經常費にて同様の成績を擧ぐべし。經常費は授業料と縣市補助金とにて支へ、臨時費は之を社會有力の士に仰ぐ。

將來 學校は之を財團法人とすべし。——何處までも進展すべし。——學校經營の基礎十分ならず、適當なる後繼者を得ずして、予死するが如き事あらば、學校資産全部を市に寄附して、經營の繼承を請ふべし。

職員の出身を一定せるは、學校を家族的に統合し、彼公立學校に多く見る様な、心血の一半を割いて、暗闘に消費する様な馬鹿な事をしたくないからである。右三校より職員を招聘する場合には、全く中央に一任して、自分で選擇しない。今や男女高等師範學校出身十名（各五名）東京裁縫女學校出身十名、其他九名（一名は外國人）合計二十九名である。昨年度の如きは、世間は職員の移動烈しかりしに拘はら

ず、本校は全學年を通じて一人の移動もない。從來職員の移動せし場合は、高等師範學校又は女子學習院の教官として引上げられた場合のみで、他は研學又は家事上の都合である。職員の統一が出来て居るから、従つて生徒の統一が出来るので、何事にも自治の風が行はれ、事務員など全く要らぬ。小使も少くてよい。これが爲に節約する經費、年額一萬圓に近い。又學校は卒業生を職員に仕立つる事にも留意して居る。既に三名の職員はそれから出て居る。

【新築事業】 創立第四年（大正六年）の劈頭に立てば、生徒は既に五百名に達して居る。假校舍今や生徒は飽滿して、狹隘を感じるといふよりも危険を感じた。回顧するに、本校は創立の始に於て、市内有力者より千餘圓（大谷・原・茂木・木村氏各三百圓其他二百五十圓）の厚意を受けた。經營の方針としては、經常費は斷じて社會に仰がず、唯臨時費のみを有力者に仰がんとしたのである。校舍の状態が斯くなつては之を有力者に訴へて、此事業に力を加へんことを請ふは、予が禮なりと考へた。當

時物價甚低く、貨幣は貴かつたが、原家、茂木家の各五千圓を始として續々と寄附がある。伊勢山大神宮の社頭に立つて、感涙にむせんだ事が幾度あつたか知れぬ。神奈川の加藤家は、市中の最も形勝の地たる鶴屋公園の一角を開いて、予が事業を歓迎して呉れた。「サア躍進」といふので、直ちに建築に要する材木を悉く伐つた。明くれば大正七年、春寒猶烈しき一月三十日、地鎮祭を擧げて安藤市長第一の鍬を執られ、五月二十一日上棟式、七月四日（米國獨立祭）移轉、十一月二日落成式を擧ぐ。中橋文部大臣は長文の祝電を寄せ、有吉知事以下參列者一千人。半歳にして、工事が全く成つた。その半途に於て物價は恐ろしい速度で騰貴して來る。躍進又躍進、危機一髪の間はその災厄を免れたのである。

建築の設計は縣立工業學校である。敷地三千坪、建物六百二十坪、工費約五萬圓、地盤工事、附帶工事、物資の寄附一萬數千圓に及ぶ。寄附金が残つたから、翌年更に七十五坪の増築をした。斯くて有志厚意の寄附金全部は、神奈川臺上、空高く聳

ゆる校舎となつたのである。寄附者は、清酒なる校服を着けたる八百の生徒が、已等の建てたる校舎を仰ぎつゝ、通學するを見ては、愛憐禁ずべからざる情が自ら起るであらう。左にその芳名を録して、感謝の意を後世に傳へる。

◎校舎新築寄附金

- 金五千圓宛 原 富太郎殿 茂木 惣兵衛殿
- 金參千五百圓 加藤八郎右衛門殿
- 金貳千圓宛 渡邊 福三郎殿 木村 庫之助殿 増田 増藏殿
- 金壹千參百圓 松下 久治郎殿 若尾 幾造殿 小野 光景殿 安部 幸兵衛殿
- 金壹千圓宛 佐藤 政五郎殿 朝田 權四郎殿 某 氏 殿
- 金七百圓 岩崎 治郎吉殿
- 金六百圓 澁澤 義一殿
- 金五百圓宛 大谷 嘉兵衛殿 野崎 貞利殿 田 中 茂殿 上 郎 清助殿
- 金五百圓宛 高島 嘉兵衛殿 原 田 久吉殿 石川 德右衛門殿 左右 田 喜一郎殿
- 上甲 信弘殿 岡部 菊太郎殿 上 瀧 七五郎殿 横 哲殿
- 平沼 亮三殿 大濱 忠三郎殿 田 邊 幸七殿 田 中 林 造殿 小 島 周殿
- 金參百圓宛

太田佐兵衛殿 中島久萬吉殿 戸塚吉太郎殿 中出久造殿
 ●金貳百五拾圓宛 渡邊 文七殿 鳥居 徳兵衛殿
 ●金貳百圓宛 井上定吉殿 松浦吉松殿 渡邊貞次郎殿 岡野利兵衛殿
 田中 新七殿 高木七五郎殿 吉田 豊吉殿 田中岩吉殿 荒川新十郎殿
 鈴木 鳥吉殿 大西正雄殿 松井三吉殿 牛山三郎殿 鈴木辨藏殿
 ●金壹百五拾圓 大庭 猛殿
 ●金壹百圓宛 中山沖右衛門殿 金子常太郎殿 關戸重太郎殿 小出 鋼太郎殿
 矢澤喜三郎殿 小川勝三郎殿 山田 駒吉殿 中瀬新八殿 田中八十吉殿
 矢島 善七殿 前田又平殿 中澤五三郎殿 酒井淺太郎殿 忽那惟次郎殿
 伊藤金兵衛殿 磯野すゝ殿 佐藤永孝殿 高島長政殿 小泉毅右衛門殿
 和田 來作殿 渡邊忠右衛門殿 石塚 彦輔殿 大西源太郎殿 犬山善助殿
 小岩井義八殿 荒井吉次郎殿 茂木六兵衛殿 吉田代次郎殿 小鹽八郎右衛門殿
 關 銀次郎殿 齋藤市太郎殿 堀 四郎殿 堀 榮助殿 内田善作殿
 坪井利三郎殿
 ●金五拾圓宛 原田千太郎殿 濱田富子殿 春田隆彰殿 佐藤繁次郎殿
 藤田 文吾殿 市原重次郎殿 星野正三郎殿 三村軍藏殿 吉永仁藏殿
 伊豫田政一殿 齋藤彌市郎殿 相川せい子殿 新井海藏殿 餅田喜之助殿
 海老塚 明殿 鳥田政秀殿 後藤房吉殿 小塚榮太郎殿 小西菊次郎殿

堀田 隆治殿 山崎彌五郎殿 長谷川 龜樂殿 津村吉兵衛殿 岩澤理八殿
 大久保ひな殿 波木井豊太郎殿 島崎久次郎殿 佐瀬龜吉殿 鈴木照貞殿
 加藤 郁二殿 澤 さく殿 大野甚右衛門殿 友田嘉兵衛殿 伊東與右衛門殿
 米津武三郎殿 脇澤 襲作殿 長岡鹿藏殿 小泉智海殿 森里五郎殿
 吉田 輪殿
 ●金叁拾圓宛 小田切忠四郎殿 鈴木善兵衛殿 松崎新太郎殿 藤井新藏殿
 大山三四郎殿 大貫榮太郎殿 關水欣平殿 龜井曆二殿 安藤 安殿
 森谷卯之助殿 志澤 治郎平殿 時田正吉殿 竹内平吉殿 佐藤平左衛門殿
 高橋 戒三殿 上保慶三郎殿 渡邊かれ殿 伊藤まつ殿 間瀬彌七殿
 松島友三郎殿 内山みち子殿 田崎泉一郎殿 多田兼吉殿 平田恒太郎殿
 石原菊太郎殿 安西仁三郎殿 中村清兵衛殿 長谷川 源藏殿 高木壽次殿
 其他百數十名

新築記念物品寄附者

三宅 磐殿 野村洋三殿 小野哲郎殿 中田中將殿 小泉長左衛門殿
 會田藤次郎殿 岩科清五郎殿 渡邊 滋殿 吉田高司殿 西川安藏殿
 平本友三郎殿 内田善六殿 其他名十餘名

本校の新事業 本校の新事業が四つある。(一)増築工事、(二)校名改稱、(三)小學校新設
 (四)岸田教頭の米國教育視察である。

【増築】 本校は、現在七百坪の建物で八百人を收容して居る。更に約四百坪（講堂を含む）の建築を加へて千二百人を收容せんとし、設計が既に出來上つて居る。女學校は本年志願者の如きは、收容數の約二倍即六百名であつたが、擴張は年々百名とする積りである。故に増築すれば一二年は餘裕がある。丁度學校の見晴らしよき一區域に六室出來る。之に小學校を新設して二三學級を收容し、やがて小學校を外に新築する計畫である。唯財界が不況であるから、考慮中であるが、機を見て實行する覺悟である。必らずしも急がない。吾人の事業は何時か成功すべき性質のもので、待てば甘露の日がある。

【校名改稱】 學校連絡等の便宜の爲に、來年度から名を普通の高等女學校に改むる積りである。目的と精神には變更はない。學科も少しの變更がある許りである。附設裁縫專修女學校は、學科四分裁縫六分の學校で、これは今の儘で繼續する積りである。

【小學校新設】 公立小學校は、市の財政に支配され、あまりに劃一的で、あまりに競争的であると思ふ。吾人は相當の趣味と餘裕の下に、子女の智徳を涵養する必要があると思ふ。安定の位置にある自分と、中央より優良なる職員を招聘し得らるゝ點を利用して、生涯の事業として起つ覺悟である。

組織 每學年男女各一學級。尋常科六學年を通じて十二學級。各學級定員四十人。計四百八十人。

職員 半數を男女高等師範學校出身者とし、半數を府縣師範學校出身者とする。その組織は、東京高等師範學校附屬小學校と異なることなし。（實地授業の練習所とせざるは本校の長所なり）

經費 實費に應ずる授業料による。

極めて重大なる事業で、慎重なる計畫を要する。本年九月岸田教頭が米國教育視察として出發するは、女學校の内容充實の研究と、併せて此大切なる新事業の組織の

資料を得んとするのである。計畫の委細は他日發表する。

【結】 吾人の事業(即ち教育)の目的は、日々にあると謂つてもよろしい。又永遠にあると謂つても宜しい。唯至善を盡して前進すればよいと思ふ。何時、何處に到着して終結するといふ事業ではない。唯進むだけ進めばよい。不慮の事あるも横濱市が附いて居る。金がなくとも市民が持つて居ればそれで宜しい。正しく發展すれば吾人の要するだけの金は出して呉れる。横濱市の財産は學校の財産と思つて居る。微々たる個人の始めた事業を助けて、數年にして本邦最大の實科高女たらしめた市民は、將來に於て更に大なる事業とすると思ふ。それにしても努めなければならぬは吾人である。必らず有力者の厚意に感激して、奮進する覺悟である。

(大正九年八月)

本書を故釋宗演禪師、故山田福三郎氏の靈にさぐぐ

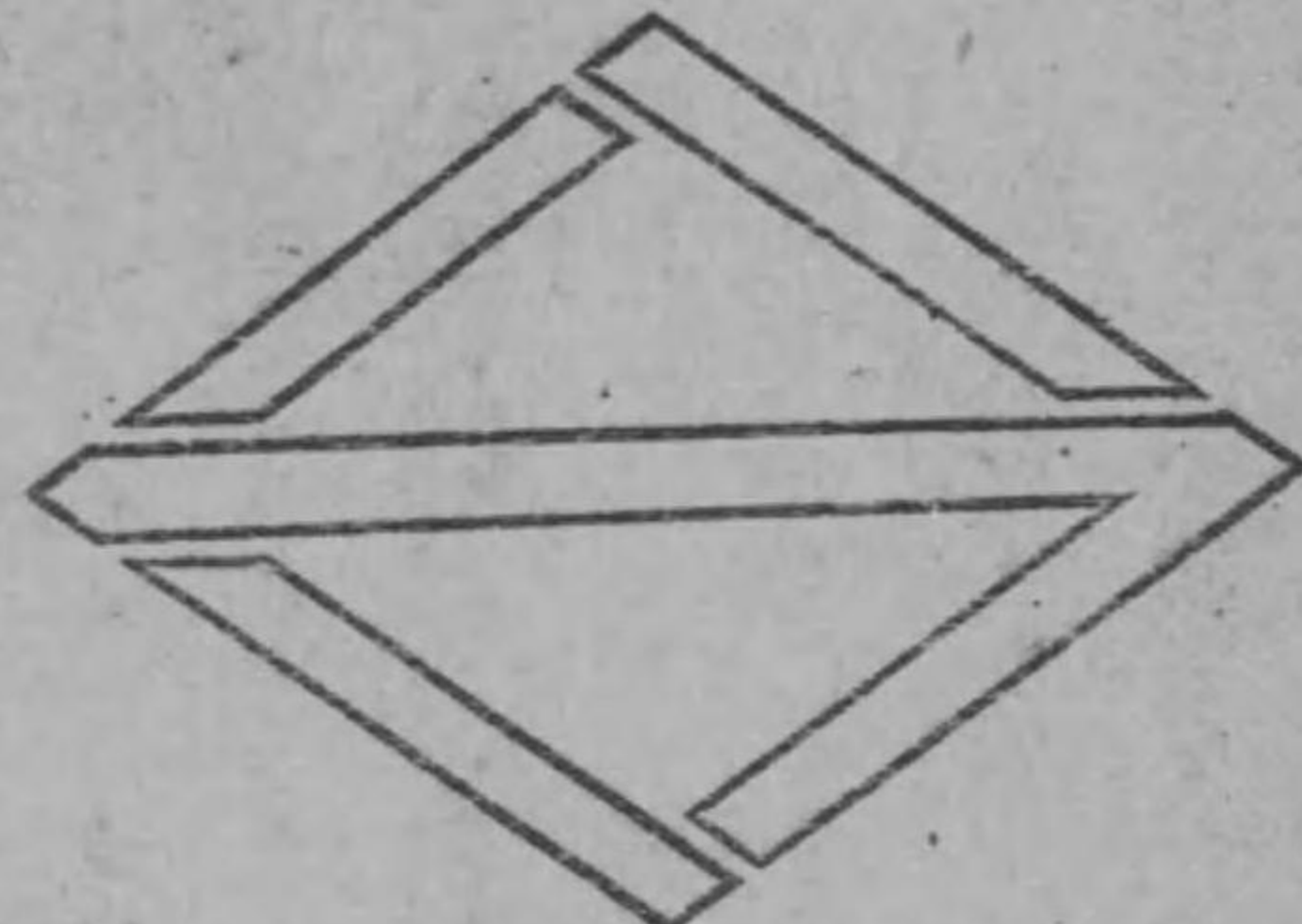
横濱奇談——文久三年の著書

異人は常に根付時計を懐中して暫くも身を離さず。其時計は丸さ差渡し一寸五分又は二寸位なり。其中の細工の密なること繪にも書かれず、言葉にも述べ難し。價は五兩から十兩なり。此品は日用便利の爲めにするものなり。例へば明日何時に面談に及ぶべしと約束すれば、必ず歸宅して待ち受くるなり。他の者も自分の時計を見て、其刻限には必ず出で行きて面會に及ぶなり。至つて調法にて便利なるべし。又寫真鏡といふ一種の奇物あり。之は人は勿論地理遠景などまで其鏡に寫せば、其物の形色合まで少しも違はず。微細にギヤマン鏡に留まりて、更に消ゆる事なき工夫なり。されば人を寫す時は、その容體物言はぬ許りなり。我國の人も存生の内に繪師に命じて、我畫像を寫し子孫に傳へなどする輩は、此寫真を用ひなば聊も違ひなくして可なるべし。價はギヤマンの大小によりて、一兩二朱乃至二分位なり。

横濱の歌

野毛の山——昔の俗歌

野毛の山からノイエ。野毛の山からノイエ。野毛のサイサ
 イ山から異人館を見れば。お鐵砲かついでノイエ。お鐵砲
 かついでノイエ。鐵砲サイくかついで小隊進め。オツビ
 キヒヤラリコノイエく。



横濱市歌——森 鷗外作

我日の本は島國よ。朝日輝く海に。連り峙つ島々なれば。あらゆる國より船こそ
 通へ。されば港の數多かれど。此横濱に優るあらめや。むかし思へば苦屋の烟。
 ちらりほらりと立てりし處。今は百船百千船。泊る處を見よや。果なく榮えて行
 くらん御代を。飾る寶も入來る港。……明治四十二年開港五十年祭に際して

大正九年十月一日印刷
大正九年十月五日發行
大正九年十月十五日再版發行

橫濱大觀典附

定額金 壹圓

郵税金 四錢

著者

佐藤善治



發行者

天野榮司

橫濱市松ヶ枝町三十番地

印刷者

小宮義比

橫濱市青木町鶴屋町三四九七番地

橫濱市青木町鶴屋町三四九七番地

印刷所

木曾印刷株式會社



發賣元

橫濱市松ヶ枝町
三十一番地

弘集堂書店

2H
41

研究 4



終